
眠れる森の

宮守 光月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れる森の

【Nコード】

N4982S

【作者名】

宮守 光月

【あらすじ】

振られ男と振り女のまったり攻防。短編。

眠れる森の村娘

文字どおりの満身創痍で、彼はそこに辿りついた。

額から流れて視界を遮る血潮をぼろぼろの袖口で鬱陶しげに拭い、炎を帯びたフランベルジュをはふり投げると、彼は広間の中央へと迷い無く進んだ。

祭壇と云えば聞こえは良いが、実際にそこに在るのは只の大きな石造りの臺だ。

魔法で閉ざされた空間の為か、塵ひとつ無い髹の床を、硬質な音を立てて彼は歩む。

その先には、長い間、見ることの敵わなかった、彼女の姿が在った。

床に落ちて尚長く波打つ黒髪、抜けるように白い肌、瑞々しい薄紅色の唇。漆黒の長衣を纏って眠る人は、確かに彼の求めていた女だった。

胸元で組んだ手に視線を向けると、淡い桜色の爪の細い指先の合間から、囁りかけの青梅が覗いているのが確認できた。長い裾の先に視線を転じれば、片方だけの透明の靴を履いていて、もう一方は跣の儘だ。

「靴は、捨てたって言ったよな」

彼が贈った流行最先端の靴は、実用的ではないと即座に文句を付けられた。その上或る日、片方が割れたし取っ取っおいても仕方無いから、と告げられたのだ。

「髪は、切ったって言ったよな」

異様に彼を警戒する同居人たちに、彼女の住処の元々小さすぎる出入り口は塞がれた。上階に在る彼女の部屋の窓から出入りしていたが、伸ばしていると邪魔だし首？げそうだと、あの最後の日、断られたのだ。

「青い梅は、食べないって言ったよな」

緑溢れる森で？ぎたてのそれを口にしようとしていたところへ、偶然出会った彼が、食べかけの紅玉林檜を彼女の側頭部に向かって投擲し、見事的中させて止めたのだ。

それが、出逢いだった。

「誰が只の村娘Aだよ。ほんつとおまえは嘔吐きで質わりい」

至つて幼稚で我が儘で直情的な自称村娘Aが職務放棄に走つた所為で、平穩だった彼の故郷は曾て無い程の恐慌に見舞われた。

今以て信じがたいことに指導者であつた彼女が姿を消すと、彼女の民たちはその役割を彼の国に求めたのだ。曰く、「彼が彼女を振つた所為だから」。

腹立たしいことこの上無い。

振られたのは、こつちだつつもの。

理由も知らされず失恋して、嵐の如き大混乱だけを押しつけられる心情が彼以外の誰に解ろうか。

果ては、どうにかしろと名許りの勇者に祭りあげられ、負いたくもない使命を背負わされる始末。

ともあれ、ここまで来たのだ。念願を叶えるまで後一步。

彼は固い寝臺の傍らに立つと、そつと手を伸ばした。昔はよく撫でたり指を絡めていた細く柔らかい髪だ。懐かしい感触を求めた指先は、然しばちりと弾けた火花に依つて拒絶された。

「いつて。くそ」

つい向きになつた彼は、立てつづけにあちこち両手を動かしては「いて、いて、いて」と呻き、或る部分で唐突に柔らかい感触を得た瞬間、びくりと腕を引つこめる。

ここかよ。

それが意味するところは言わずもがな。夢見勝ちな彼女らしさに、彼は苦笑混じりの溜息を零した。さつさと済ませてしまおうと身を屈めようとしたが、徒に広い祭壇と横に広がった髪に阻まれ狙いが届かない。

やっぱいろいろ足んねえよな、こいつ。

本人が聞けば真っ赤になって怒りそうなことを沁々と胸中でぼやき、頭部側の臺上に膝を着いて軽々と上る。

恐らく彼女が望んだような絵面には成らないだろうが、致し方あるまい。

彼はひと息吐くと、頭上から覆いかぶさるようにして、そこに触れた。相手の鼻先を掠めた頬にびりつと痺れが走り、眉を顰めて身を離す。

「おら、とつと目え覚ませ」

びくりと震えた瞼が、ゆるりと持ちあがる。

優美な睫の下から、彼のお気に入りの金瞳が見返す前に。

「で、物は相談なんだが」

彼女を取りまいていた魔術のけわいが、ふわりと去っていったのを持ち前の獣の如き本能で速やかに察知し、滑らかな両の頬を諸手で挟みつけると彼は再び躰を倒した。先程於りも長い接触で飢えを少し許り凌いでから、驚愕も露わな金色の双眸を逆しまに覗きこみ、彼は喜色満面に笑った。

「おとなしく俺に殺られてくれるよな、魔王様？」

眠れる森の王子様

その瞬間、幼稚で我が儘で直情的な自称村娘A通称魔王は、果たして薄情でもあった、と彼の胸に刻まれたことを、彼女は知らない。

「だ……」

「あん？」

「誰 いたっ」

強かな爪弾きを額に受けて、彼女の視界はうるりと滲んだ。

「なんで!？」

期待されていた反応を返せなかったらしいが、憤るべきなのは自分の方ではなからうか。何せ、目覚めた途端に視界を占めた上に諒承も取らず を奪っていった その直ぐ後に物騒なことを言われた気もするが、寝起きでうまく認識できなかった のは相手なのだ。

だが、一変した場の空気が彼女の尤もな抗議を押しとどめる。

「おまえは、いちいち、最っ悪、だよなあ？」

そろりと涙目で見上げれば、片頬を上げた男の、裏路地を跋扈する無頼漢も斯くやの凶悪な表情がそこに在った。序でに纏うは魔神も逃げだすだろう極寒の冷気だ。

「こわっ。って、きみ、まさか」

彼女は痛い程に見開いて忙しなく瞬きを繰り返した。平常とは云いがたい、傷だらけでぼろぼろで、鮮血を流している見知らぬ男の形の隅々を、その視線は手懸かりを求めて徘徊。

そう云えば鉄の味がした、と彼女が思いあたると同時に、ああ、と相手も気が付いた。

「そっぴや、金髪も青い目も失くなっちゃってたな」

おまえ、好きだったよなあ。

苦笑して、彼は見下ろす額の赤みを曲げた指の背でそっと撫でた。

「ど、して」

「行きなり肘鉄砲食らわされた理由ぐらい、知りたいだろ」

だって、と濡れた唇が小さく動き、礎と止まった。一旦彼から逸れた視線は、戻ってきたときには困惑に満ちていた。

「今、いつ……？」

「んー？ と、二百年は経ってんじゃねえか。よく判んねえけど」

彼は飄然、彼女は茫然。不断、元へ昔どおりと云えなくもない。

「え、なんでそんなに……と云うか、何、やってんの」

がばりと身を起こして振りかえり四つ這いになると、彼女は純魔力を湛えたその比類無き瞳で、彼の抱く業の一端を瞬時に認めた。

「何やってんのよ、ばかあ！」

勢い振りおろした拳は、いとも軽く彼の掌へと納まってしまふ。

「おまえの側近、口巧いんだもんよー」

『個人個人の御要望にマッチする、各種プラン、豊富なオプションを御用意！』

『大好評御礼！ 今なら特別御奉仕、もう一転生プレゼント中！』

『記憶データ完全移行も、全てプロにお任せで安心！』

軽妙な謳い文句に、浮り乗せられる彼が目には浮かぶ。

「あああああんの、悪魔……！」

彼女はぎりぎりとしばった歯の間から憎々しげに吐きだすが、相手に取っては誉め詞である。

「で、理剣に魔剣、お好みは？」

オプシオン、結構高かったんだぞー。

のんきな口調にがくりと力が抜け、再度、四肢を付く。

理剣であれば魂魄ごと消滅、魔剣であれば抗わぬ限り魔魅力を失い徒人と相成る。詰まり、彼はまじめに魔王を屠りに来たのだ。

どさりと腰を降ろして座りこむと、それも本望と、彼女は真剣に考えこんだ。

いや然し、その前に。

「……………ど、どっちも？ 取りあえず理剣、貸してほしいか

なあ」

眉間に皺を寄せて小首を傾げる彼女に、彼は眉を上げた。

「慾張りだな」

「や、わたしのことはいいんだけどきみがさあ」

どうすべきかと思案に暮れつつ無意識に呟くと、

「ふうん」

再び目の前から冷気が漂いはじめた。ぎょっとして顔を上げれば、酷薄な冷笑と搗ちあう。

うわ。

確かに容姿は記憶と違うが、中身は彼の儘。と思えば、曾ては見る機会に恵まれなかった類のものである。だが、新鮮、などときめいている場合ではない。

「あっさり捨てといて、今更何、気にしてんの」

伸ばされた右手が、彼女の喉に触れる。荒れた指先が首筋をゆっくりと上下する。力は籠められていない。けれども、彼女が声を発するには、かなりの力が要った。

「……あっさり、なんかじゃ、なかったよ」

「へえ？」

全く信じていない口調。当然だ。ほろ苦い笑みが零れて、彼女はゆるゆると首を振る。

「ね、理剣、貸して。きみの律を正さないよ」

「あの時、そのあほうな頭でどんなばかなことを考えたのか、言ったら貸してやる」

確かに自分が賢いと思ったことはないけどっ。

文句を言っても仕方が無いことは重々承知しているので溜息ひとつで堪え、渋々口を開いた。

「だって、きみは、磨属でしょ」

「あん？」

「王太子様だし……だったし？」

「はあ？」

「だから、私のことなんか忘れて幸せに　痛い痛い痛い！」

彼女の顛？を挟みつけた両の拳を外して、彼は真摯な眼差しで金の瞳を見据えた。

「おれが、おまえを忘れた方が幸せになれると？　そう思うのか」

彼女は視線を下げて頷いた。

「おまえは」

「え？」

「そう考えたってことは、おれを忘れれば幸せになれるんだな」

建前と本音の間で揺れる彼女がそれでも返せる答えは、唯ひとつ。

「きつと」

彼女は知らない。

そう小さく告げた自分の表情が、彼が初めて目にするものだとは。

「　　そうか」

彼は徐ろに、首に掛かっていた二連の鎖を引きちぎる。

その先にぶら下がっているのは、玩具のような小さな柄がふたつ。赤子がこの世に生まれいるときに握っけていても問題が無いように、魔力で無刃化及び縮小化されたふた振りの剣だ。

在るべきところへ導く力と、在りたいところへ導く力が、視界を奪う光と共に、溢れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4982s/>

眠れる森の

2011年6月20日04時10分発行